酒井　正

ワークショップ報告

展覧会名
NO MAN'S LAND　創造と破壊@フランス大使館
2009年11月26日（木）～2010年1月31日（日）
場所：フランス大使館旧館（東京都港区南麻布4-11-44）

ワークショップタイトル
「キモチをカタチに大作戦　ハートをアートでつなげよう！」
開催日：2009年11月29日（日）

在日フランス大使館は、2009年11月上旬に同敷地内に建設された新しい建物に移転した。これに伴い解体してしまう50年あまりの歴史がある旧館の施設を活用し、日仏の文化交流発信の場となるユニークなアートイベントが開催された。イベントのタイトルは「No Man's Land（ノー・マンズ・ランド）」。建物が解体されるからこそ実現できるウォール・ペインティングや、解体廃材を用いて創られたオブジェの展示など、70名程のアーティストが事務室、廊下、資料室、階段、地下室、中庭などあらゆる場所で自由に空間を創りあげた。国際的に有名な、あるいは頭角を現し始めた日本とフランス両国のアーティスト達や、様々なクリエーション活動に携わる学生達が参加した。

私は日本人の子供達とフランス人の子供達をアーティストにするべく、それぞれが制作したドローイングを素に立体造形化して、共同制作によってみんなでおおきなモビールを制作するワークショップを開催した。最初にマーカーをつかって大きな紙に自由にドローイングをする。日本人の子供は画面の余白がなくなるくらい激しく手を動かしていたのに対して、フランス人の子供は描く要素をしぼって表現していたのが印象的だった。日本という同じ土地に暮らしていても、やはりお国柄で違いがあるようだ。次にドローイングで表現したものが立体作品になるように各種素材で制作する。２次元のものを３次元にする作業は容易なことではないが、みんな知恵を絞って立体にしていく。そして２人のグループになり、立体作品をバランスがとれるようにつなげてやじろべいにする。最後にどんどんグループが合体して一つのモビールが完成する。みんなのアートを結集してできた大きなモビールが天井から吊された時、日本とフランス両国子供達のうれしそうな歓声が響いた。

ドローイングをする子供達

針金やスポンジなどを使って立体にする

ドローイングと完成した作品